

レッツ・ダンス

大橋一夫



数日前に設定しておいたスケジューラーソフトが正しく作動し、チャイム音と共に、>PM3...00、社員旅行くとのメッセージがPC画面にポップアップした。ジャック・金は、ほとんど最後まで書き上げていたEメールを完成させ送信ボタンをクリックした。社長室のハイバックチェアから立ち上がり、ドアを開けてオフィスに出た。アメリカに出張したとき、シリコンバレーのIT企業のオフィスがカルフルで社員が活気づいていたのが印象的で、ジャックはそれを習い、自分の会社のオフィスインテリアを薄緑色と薄橙色のツートンにしていた。ただし、各個人の机を仕切るパーティションの高さをアメリカよりも低くして、立ち上げれば部屋全体を見渡せるようにし、社員に孤立感を抱かせないように配慮していた。

15人の全社員が一人も欠席せず、朝からカジュアルウェアで出勤してきた者も多い。スポーツ好きの元氣娘——ニコル・李など、テニスラケットを持参してきている。

「ニコル、テニスの相手は決まっているのか？」

「社長様（韓国では社長にも様を付ける）、ナンシーと対戦することになっていますし、崔部長様とは混合ダブルスのペアを組みますのよ」

「そうか、私もペアの相手を探しておくべきだったな、残念」

この会話を聞きつけたのか、今回の幹事を任せておいた営業部長のアルバート・崔が近寄ってきた。

「社長様、全員準備ができましたので、4台の車に分乗して先に出発します」

「OK、私は、日本から招待した小林さんを仁川空港でピックアップして、後から行くのでよろしく頼みます。途中、夜食の食べものや飲み物を買うとき、小林さんが好きな豚足を買うのを忘れないように」

ジャックは、誰もいなくなったオフィスの大通りに面した窓からソウル随一のハイファッション街であるロデオ路を行き交う人々の流れを眺めた。バックパッカー風の日本人らしい若い女性の二人連れが歩道で写真を撮っている。隣のテナントビルの一階にはPRADAの直営店があり、それを背景に記念写真を撮っているのだろう。毎日繰り返される光景だ。この時期、ソウルではイチョウの街路樹はまだ色づいていないが、社員旅行先の雪嶽山からは紅葉の便りが届いている。>あれから二年半になるのか——、あの時は、汝矣島（ヨイド）のオフィスの窓から桜並木を眺めていたな……>。

ジャック・金は、ソウル大学大学院を卒業し、それまで猶予されていた徴兵に応じ海軍に入隊した。配属されたのは海軍内の教育施設で、電子工学の教官を務めた。厳しい規律で有名な韓国軍の中でも、そこにはイジメやシゴキもなく居心地は良かったが、子供の頃からの夢であり、親戚からも期待されていた学者になる希望に対して遠回りになることは避けられなかった。修士課程を終了後、そのまま博士課程に進学することは、奨学金や親戚からの援助があつたとしても、母子家庭の経済環境

境では断念を余儀なくされた。

二年半の兵役を終え、就職活動の結果、世界的なコングロマリットであるWCEの韓国本社に入社した。この会社は、当時から週休二日制を取っていて土曜日に博士課程に通学できる上、韓国企業よりも給料が良かった。しかし、順調な生活は四年半しか続かなかった。

1997年に韓国を襲ったIMFショックを契機として、WCEは、韓国からの引き上げを決定し、従業員に対しては、特別退職金を受け取って退職するか、韓国の引き受け会社であるL電機に転籍するかを選択の余地を与えた。ジャックは、2億ウォン（約2千万円）の特別退職金をもらって退職した。その2億ウォンとベンチャービジネス投資グループからの10億ウォンを元手に興したのが現在の会社である。退職手続きのために最後にWCEに出社した日、窓から汝矣島（ヨイド）の満開の桜並木が見えたのが印象に残っている。＞学者への道を捨て実業界に転進しようくと、そのとき思った。

新たにソウルの空の玄関となった仁川国際空港の駐車場に車を駐め、ジャックは、待ち合わせ場所の国際線到着ロビーを目指した。外側から見る空港ビルは、ガラスと梨地仕上げのステンレス板を用い、直線が少なく曲線を多用した未来都市を思わせる造形美を表出している。ひっきりなしに行き交う都心各方面と結ぶシャトルバスも新空港にあわせて新車に入れ替えられたようだ。全てが新しい。

税関の扉が開き長身の小林が到着ロビーに現れた。小型のスーツケースとパソコンバッグを持っている。どこに行くにもパソコンを手放さないのは以前と同じだ。

「ジャック、オレガンマンイムニダ（お久しぶりです）」

小林は、ジャックと一緒に三年前WCEの日韓共同プロジェクトに参加したときに覚えた片言の韓国語を忘れていないようだ。同じ年齢のせいもあり、一年間のプロジェクトの期間、仕事もそのあとの遊びも一緒だった。

「オソオセヨ（いらつしやいませ）」。ジャックも簡単な韓国語で答える。しかし、韓国語での会話はそこまでで、すぐ英語に切り替わった。

「疲れているだろうが、ラッシュアワーが始まらないうちにすぐ出発しよう。目的地まで五時間くらいかかるかな」

「OK、眠くなったら寝るから、かまわず走ってくれ」

「車を変えたのか？ 前は『現代ソナタ』だったよね」

「Yes、……」

「こんな高い車を買ったんだったら、アメ車のシボレー・カマロが買えたんじゃないか？ 韓国は右側通行だから左ハンドル車でも問題ないし……」

「韓国ではビジネスで社長が乗る車は、黒の『現代グレンジャー』にほぼ決まって

いるんだよ。輸入車にも乗ってみたかったけど……」

グレンジャーのV6、3000ccエンジンのスムーズな回転は、大型の車体を軽々と走らせ、高速道路仁川空港線からソウル市南部のオリンピック道路を経て漢江沿いを上流に向けて疾走した。四時間ほど走り、半島の東西を分ける分水嶺の峠に達した。昼間であれば雪嶽山系の紅葉が見られるはずであるが、街路灯もない山道の、月もない漆黒の空に無数の星が山脈のシルエットを暗く描き出しているのが見えるのみであった。あと一時間もすれば目的地に到着するだろう。

「よく会社を興す気になったな」

「退職金でアパートでも建てて悠々自適な生活をするのもいいが、チャレンジしてみたかった。一緒に辞めたWCEの同僚達も来てくれることになったし」

「学者への道はどうしたのか？」

「……、援助してくれた親戚や友人たちのこともあるので簡単にはギブアップでしかなかったが、会社の売り上げも伸び、会社負担で社員旅行もできるようになった。今の状況なら理解してくれるだろう。」

「もしかしたら、両班（貴族）の家系なの？ 本貫が『慶州金氏』なので、そうじゃないかと思っていたが」

「Yes、今は両班の制度はないが……」

韓国の戸籍には、名前に加えて『本貫』が記載されている。これは千年ほど前の祖先の住所を示している。同じ本貫同士の男女は、ごく最近まで法律で結婚できないことになっていた。慶州は当時の首都があったところで、『慶州金氏』は、高貴な家系であることが多い。

今晚の宿舎になっている『碧湖コンドミニアム』は、世界的な自動車タイヤメーカーに成長した碧湖グループが事業多角化の一環として保養所ビジネスに進出し、韓国随一の景勝地、雪嶽山の裾野に建設した、テニスコートもプールも付いているデラックスな施設である。山脈が海岸線にせまった韓国東海岸の地形により、昼間なら客室の窓から山の紅葉と日本海の大海原を同時に見ることができるとある。ジャックは、コンドミニアムのアプローチから車を入れ、いつも見慣れている社員達の車が駐車している隣にグレンジャーを駐めた。

ジャックと小林が大広間に入ると、先に来た連中は、すでに酒盛りの最中で盛り上がっていた。

「Welcome back to Korea!」、WEC時代から知っているアルバートが真っ先に小林に声をかけた。

「ヤア、ヤア、アルバート、君が営業部長をしているのはジャックから聞いたよ」
「初めて経験する営業だが、IT化の時勢にのって、売り上げが増えている。助かるよ」

「良かったな。昔の仲間が元気にやっているのを聞くのは嬉しいよ」

「小林さん、アンニョン・ハセヨ！（こんにちは）」、同じくWCEの仲間だったナンシーが小林に声をかけた。

「ナンシー、君も加わっているのか！ WCE時代に君がソフトを書いた『韓国国際航空』の予約システムは今でも動いているようだ。今回のフライトでも問題なく予約できたよ」

「覚えていてくれたんですね。あの頃は食事の時間も切りつめて仕事に没頭したわ」
「その成果で客先から表彰されたとき、副賞の賞金でプロジェクトの人たちを夕食に招待してくれたね」

「あのときは、二次会でナイトクラブに流れて行って、さんざん踊ったわね」

「韓国の人たちはダンスがうまいから合わせるのに苦労したのを覚えているよ」

「OK、今日も踊りましょうよ。 ニコル！ ジルバの曲をかけて」。ニコルはナンシーの好みを知っているのか、かかった曲は『バイ・ミア・ビスト・ドウ・シェーン（素敵なあなた）』だった。

「久しぶりだが……、よし！ 今日ナンシーが目を回すまで、ターンさせてやるぞ！」

「背が高いから、本当に振り回されちゃいそう！」

それから二年経った。ジャックは、誰もいなくなった会社のオフィスに来ていた。机や椅子は先ほど業者が引き取って行った。あとは戸締まりをして鍵をビルのオーナーに届けるだけである。什器が無くなった空間は、広々としてツートンカラーの壁面が埃っぽく見える。ジャックは、カバンからノートPCを取り出し、小林宛のEメールを書き始めた。ここから発信する最後のメールとなるだろう。

>ジャックのEメール<
小林さん、お元気ですか。

楽しかった雪嶽山旅行から二年経ちました。あれからも売り上げが増え、一見順調に見えた会社経営も、実は売上金の回収が進まず資金繰りに行き詰まり、結局、解散することになりました。IMFショック後の景気の高揚で韓国経済全体が浮かれました。中には初めから支払う気がない「取り込み詐欺」まがいの顧客も多くありました。与信とか売上金回収のノウハウが全くない技術屋集団がITバブルに踊らされてしまったということでしょう。

私は、大学時代の友人の紹介でZ工業大学の講師の職にありつけましたが、社員達の中には、まだ再就職先が決まっていない者もいるのが心残りです。

また韓国に來られることがありましたら連絡ください。楽しかった時代の思い出話をしましょう。

Good Luck! ジャック・金

ジャックは　PCをカバンに入れビルの外に出た。雲一つ無い真っ青なソウルの秋空のもと、ロデオ路のイチヨウ並木はすっかり黄色に色づき、走り去る自動車が巻き上げる風に落葉が舞っていた。

$$\begin{matrix} > \\ \vdash \\ < \end{matrix}$$